

## 新聞版『十八春』と単行本版 『十八春』についての考察

河尻 和也

### 1. はじめに

『十八春』は張愛玲（1920 - 1995）が 1950 年共産党統治下の上海で発表した長篇小説である。彼女は当時、ペンネーム梁京を用い『十八春』を上海の新聞『亦報』に連載した。後にアメリカに渡った張愛玲は『十八春』後半部の共産主義を称賛した個所を書き換え、1968 年『半生縁』として再出版した<sup>1</sup>。

張愛玲は 1951 年上海の新聞『亦報』にて『十八春』を連載終了時、高唐との談話の中で次のように言う。「『十八春』を書き終えて後、明らかに前半部に手落ちのある事を発見したが、訂正する事もできず、心の中にわだかまりが残っている。」<sup>2</sup>1951 年『十八春』は上海亦報出版社から単行本として出版される事となる。陳子善も述べるように 1951 年版単行本『十八春』では、多くの部分が改稿されている<sup>3</sup>。すなわち現在出版されている『十八春』は、張愛玲が新聞版から改稿して後の『十八春』である<sup>4</sup>。しかしこれまでの研究では張愛玲がなぜ『十八春』を単行本化する際、部分的な補修を施したのかについてその理由は明らかにされていない。

本論文では、張愛玲が『十八春』を執筆する際に参考にしたとされる J.P.マーカンドの『H.M.プラム』<sup>5</sup>、新聞連載時の『十八春』、1951 年の単行本化された際の『十八春』および『半生縁』を比較考察する事により、新聞版『十八春』と単行本『十八春』の改稿の理由について考察を行う<sup>6</sup>。

### 2. 新聞版と単行本版の違い

新聞版『十八春』と単行本版『十八春』<sup>7</sup>には、段落の変化、句読点

の変化、文章の入れ替えなどの細かな点を含め多くの異なる点が存在する。しかし本稿においては、それら細かな改稿点については考察せず、その中で重要と思われる点についてのみ脚注において示して行く事とする。具体的考察は後の節で述べる事として、まず双方の変更点を大まかに挙げる。

新聞版が単行本版と大きく異なる点は、①プロットの変更が見られる点、②それぞれの登場人物の性格付けに対する変更が見られる点、③小説中の時間的叙述の変更などが挙げられる。以上に挙げた3点は相互に関連し合い意味をなしている部分もあるため、以下の考察においてその点についても明らかにする。

### 3. プロットの変更について

新聞版が単行本版とプロットの面において異なる点をあげる事にする。まず新聞版において、主人公沈世鈞の友人であり同僚である許叔恵の共産主義への傾倒が、大学時代からすでに見られるという点である。

叔恵は西北へ行きたいと思っていた。そのような建設中の地方に行って仕事をやる。これは、彼と世鈞が大学時代にそのような志があると話していた事である。(1.3)

この事実は単行本版には存在しない(『半生縁』では彼の共産主義への傾倒が小説を通して存在しない)。単行本版、『半生縁』では同様に3章で上司の葉氏の誕生会が開かれる。しかしそのプロットは新聞版には存在しない。単行本版『十八春』と『半生縁』では叔恵が会社を辞職する直接のきっかけが葉氏の仕事上での不正によるものである。それに対し、新聞版ではそれが友人から届いた仕事の誘いによるものという異同がある。

叔恵もその日とても興奮していた。彼が朝早く家に帰ると、彼が上海にいない内に、1通の手紙が届いているのを発見した。それはある友人が送ってきたもので、彼にある会社のポストを紹介してくれるという内容だった。その会社は蘭州にあり、奉天にも支店を持つ。(5.8)

張愛玲がなぜ以上のプロットを削除したのかという理由については、他プロットとの関係上、時間的叙述の変更の節において詳述する。

次に4章で南京の実家に戻った世鈞と、彼について南京へと向かった

叔恵のプロットについて見て行く。単行本版（『半生縁』も同じ）の4章では雨で玄武湖に行く事が出来なくなった世鈞と叔恵が、幼馴染の翠芝の家に麻雀をしに向かう。しかし新聞版では世鈞と叔恵は大学時代の友人一鵬の誕生会（ダンスパーティー）へと向かう<sup>8</sup>。

このプロットは、結果として叔恵と翠芝との恋を強調させることとなる。しかしプロットは異なるものの、単行本版でも映画館で翠芝の靴を取りに行くため世鈞と別れた叔恵が、翠芝と二人で玄武湖へと向う。その結果、単行本版によって変更されたプロットでも、叔恵と翠芝二人の恋の発展であることに変わりがない。ではなぜ張愛玲はパーティーのプロットを変更したのであろうか。これまでの研究では高全之が『H.M.プラム』におけるジョーと一鵬の共通性を述べている<sup>9</sup>。筆者も高論文の述べる両者の一致について異論は無いが、しかしそれは単行本版、『半生縁』における一鵬とジョーの登場人物継承の一致においてのみである。なぜなら新聞版では、一鵬は明らかに『H.M.プラム』のブラウンとジョーの双方の性格を併せ持った人物として描かれているからである。ここでパーティーの様子を詳しく見てみる事とする。新聞版で、自分の誕生会なのにダンスを踊ろうとしない一鵬に対し、それを不思議がった愛弛が次のように尋ねる。

「一鵬、あなたどうしてダンスをしないの。」（中略）一鵬は言った。「ここ二日間、昔の傷が痛んで踊れないんだよ。」叔恵は言った。「どんな傷だい？」「おまえ忘れたのか？あの野郎が足を引っ張って…」（中略）一鵬は言った。「あいつは俺を噛んだんだ！」彼は明らかに、誰かにそれを聞いてもらいたがっているようだった。世鈞は言った。「君を噛んだ？」（4.13）

ここで『H.M.プラム』9章における、友人達と大学時代のフットボールの試合について語るブラウンの台詞を引用してみる。

「あいつは俺を噛みやがったんだ。」彼は言った。「あいつら突っ込んできて噛みやがった。」「おまえを噛んだ？」誰かが繰り返した。そしてそれはブラウンが望んでいた事だった。「おまえ信じないのか？よし、あいつの歯型がまだあるぜ。信じないのならズボンをおろすぜ…」（『H.M.プラム』 p94）

『H.M.プラム』におけるブラウンは、マーカンドの研究者グロスが述べるように、「活動的で最も成功した男であり、万能なスポーツマン」<sup>10</sup>であり、皆が彼をリーダーであると思うような人物である。そして

新聞版で世鈞は一鵬を以下のように語っている。

…一鵬は大学時代サッカー部でキャプテンをしていた。世鈞は大学へ進んだばかりの頃、彼をととても尊敬していた… (4.11)

この点からも新聞版での一鵬が、『H.M.プラム』のブラウンの性格をも継承していることが窺える。しかし、新聞版、単行本版、『半生縁』を通して、翠芝との婚約を解消し、「聡明になったら誰よりも聡明である」と文嬭に言われたことを、一鵬から聞く世鈞は次のように考える。

…彼(世鈞—河尻注)はここまで聞いて、思わず驚いて眉毛を吊り上げた。彼はこれまで一鵬を、“聡明になったら誰よりも聡明である”とは思った事がなかったからである。(10.18)

以上のように、張愛玲は新聞版『十八春』を創造する際、一鵬の性格に対してブラウンとジョー双方を併せ作品を創造している。しかし、新聞版『十八春』では、『H.M.プラム』における、ブラウンの性格とジョーの行動を併せたことにより、後半部で「尊敬を寄せていた一鵬」と「聡明と思っただ事がない一鵬」との間で矛盾が生じている。そのため張愛玲は単行本にする際にブラウンの性格を削除し、以上のプロットを映画から玄武湖へ行くことに変更したのだと考えられる。

次に12章における、プロットの変更を見て行く。単行本版12章では、曼楨が阿宝を世鈞からもらった指輪で買収して、手紙を世鈞に出そうとし、結果阿宝の裏切りにより指輪は曼璐の元へとわたってしまう。しかし新聞版にそのプロットは存在しない。単行本版で指輪は、12章で曼璐の策略により世鈞に手渡され、傷ついた世鈞がそれを捨ててしまう。新聞版においては、14章で世鈞の結婚を知った曼楨が傷つき、自ら指輪を川の中へと投げ捨てる。新聞版では次のように言う(以下の引用部に記す番号は、後の考察において用いる)。

①慕瑾は姉を思い何年もの間、結婚しなかった。しかし世鈞はあっさりと彼女(曼楨を指す—河尻注)の事を忘れてしまったのである。彼女のどこが姉より劣っているのであろう。彼女は憤りと不満を感じた。でも——もししたら慕瑾の方が自分には合っていたのかもしれない。しかし、事実…慕瑾は後に彼女を愛したが、彼女にふられて後、2ヶ月とたたない内に

別の女性と結婚してしまったではないか。(14.14)

②彼女は橋の上にとっても長い間立っていた。その後で手にはめた、赤い指輪を外すと水の中へと投げ入れた。(中略)指輪は暗闇の中を落ちて行き、少しの影さえも見えなくなり、音も無く川の中へと吸い込まれて行った。ただ、曼楨から見ると、最後の赤い明かりが、暗闇の中で消えてしまったかのようにだった。(14.15)

以上のプロットを張愛玲がなぜ変更したのかという理由について、曼璐の残酷さを強調し、指輪を世鈞に捨てさせる事により、世鈞の曼楨を愛する気持ちを(世鈞と曼楨の恋愛)強調するためだと私は考える。なぜなら単行本での世鈞は12章で曼楨が病気であると知らせを受け(実は曼璐によって監禁されている)、喧嘩のせいで曼楨が自分と会おうとしないのだと考え、その後2度彼女を探しに行く。しかし新聞版で世鈞は一度だけは彼女を探しに行くものの、すぐに叔父に連れられ南京へと戻って行く<sup>11</sup>。そして彼は南京でもう一度彼女を探しに行こうとするのだが、虚栄心にかられ次のように考える。

③彼は六安に彼女を追いかけて行き、彼女と話をすべきなのだ。…話をしても嘘になる。ここまで来たからには何を話す事があるのだろう。彼が彼女と出会って、慕瑾と結婚した彼女を見たならば(実際は結婚していない—河尻注)、彼もすぐに話をすることを諦めてしまうだろう。ただ六安という場所に、見知らぬ人がやって来たら、人々の注目を集めるのではないだろうか。噂は必ず大きく広まる事となり、人々はそのような熱狂的な失恋者がここまで追いかけて来た事を知る事になるだろう。彼はそんな役を演じたくはないのである。世鈞は正にある種の劣等感から、自分をさらにおかしな地位に押し上げたくはなかったのだ。(12.20)

単行本版では、上に述べたよう世鈞に2度曼楨を探させ、彼の2度目の訪問において曼璐の計略によって指輪を世鈞に捨てさせる。その事により世鈞と曼楨の悲劇を強調させる効果をあげている。登場人物の性格の変更については次節にてさらに詳しく言及する事とする。ただここで簡単に述べるとするならば、①、③を見るだけでも、新聞版で張愛玲は曼楨の気持ちに重点を置きすぎているように思われる。そして、それは物語冒頭部の世鈞が過去を回想し、曼楨を思う場面とも矛盾が生じてくる<sup>12</sup>。

次に 15 章における、曼楨の母の戦争体験について考える。単行本版 15 章においても曼楨の母は新聞版と同様戦争を体験するのであるが、その描写は異なっている。新聞版では曼楨の母の戦争体験が単行本版に比べ、より詳しく言及されている。では、なぜ単行本版ではそのプロットを削除したのだろうか。私はそれを、物語のバランスを考えての処理なのだと考える。なぜなら物語において曼楨の母が占める重要さは、彼女の戦争体験を詳しく述べるほどではないからである。

最後に 17 章、世鈞と曼楨の再会のプロット変更を考える。まず新聞版 17 章では、単行本版と異なりその時期がはっきりと示されている。新聞版でははっきりと、「その日は国慶節であった… (17. 14)」と示されている。この変更の理由は後述する。新聞版では、単行本版にある世鈞と曼楨が曼璐を思って述べる会話、「今となつては一彼女を作り上げてきたあの社会はすでに崩壊したのよ、私達も一彼女を忘れるわ」という台詞が見つからない。筆者入手の資料では当部分の新聞が欠損しているため、はっきり断定する訳にはいかない。しかしこの台詞を引き出す会話が指輪のプロット（世鈞が曼璐から指輪を返される）と関係しているため、やはり単行本版において追加されたプロットであろうと考えられる。プロット追加の理由について私は世鈞と曼楨の悲劇と曼璐の行動の異常性との対比から、新中国への希望を増幅させる効果があると考えている<sup>13</sup>。

#### 4. 登場人物の性格付けの変更について

『十八春』における沈世鈞の性格は新聞版、単行本版ともに（『半生縁』も同様）優柔不断であり、気が弱く、鈍感であるが正直であると言えよう。彼の性格は、張愛玲が『十八春』を執筆する際に参考にした『H.M. プラム』の主人公プラムに共通点を見ることが出来る。本論では主旨とずれるため両者の描写の相似について具体的に言及する事はしない。

新聞版、単行本版、『半生縁』において物語の冒頭部で世鈞は、語り手によって彼が過去に曼楨という女性と恋愛関係にあった事、現在ではすでに彼女と別れている事実が示される。そして語り手により現時点から（物語の現時点は 17 章）彼の過去が明らかにされて行く。しかし新聞版が異なる点は、沈世鈞の内向的性格が更に強調されている事である。以下に示す文章は、新聞版のみに存在し単行本版、『半生縁』には存在しない。

世鈞はあまり話をするのが好きではなく、その事を当然これまで誰にも話した事が無かった。(中略) 彼はある時期とても長い手紙を叔恵に出そうと思っていた。彼自身とても心の中で苦しんでいたからである。ただ半分書いて、ちょっと見直してみると、まるで自分の思ったように書いていなかった。(1.1)

前節でも述べたように、単行本版で世鈞の性格は新聞版に比べ内向的 성격が減少し、曼楨を愛する気持ちが増加しているように思われる。その理由は、冒頭部の彼の回想に物語を合わせるという物語のバランスを考えた上での結果であるといえる。

次に曼楨の描写の変更について、前節で述べたように新聞版は単行本版より彼女に重点を置いている事が窺える。しかし全体として、単行本版での世鈞の変化（曼楨に対する気持ちの増加）によって、曼楨も変化しているものと考えられる。また曼楨の曼璐に対する思いも、新聞版、単行本版で微妙な変化は有るものの、物語を大きく動かすような大きな変化ではない。

次に叔恵の性格の変更である。新聞版において彼の性格は、単行本版、『半生縁』よりも多分に『H.M.プラム』におけるビルの性格との共通点を有している。ビルはマーカンドの研究者グロスの述べるように、「根無し草 (rootless)」であり、強い上昇志向を有しており、プラムの友人で大学時代の金持ちの友人達に嫌悪感を抱いている<sup>14</sup>。ここで新聞版のみに存在する、翠芝と一鵬の結婚を知った叔恵の言葉と、ビルの言動とを比較してみよう<sup>15</sup>。

叔恵は言った、「あいつは（一鵬—河尻注）本当に能無しなのに。」世鈞は言う。「だけど、彼は学生時代、とても抜きん出ている、いつも学園の花が彼を求めていたじゃないか？でも奇妙なのは、彼が分を護って従姉妹なんかと結婚した事だな。」叔恵は少し黙ってから言った、「別におかしくないさ。家柄が釣り合っているし、相手は彼よりもさらに金持ちだ。妻の財産が加われば、彼も都合が良いと思うがね…」(10.6)

俺はケイのような女性がどうしてジョーなんかと結婚するかが分らない。あいつは本当に食えないやつだぜ…(『H.M.プラム』 p 210)

新聞版において、叔恵の性格はビルの野心的な性格を革命への早く

からの志として変化させ、受け継いでいると言える。叔恵の性格は単行本版、『半生縁』と変化するに従い、以上のようなビルの性格を減少させて行く（行動はビルと共通している）。そして単行本版、『半生縁』においても、彼は家柄に対して微妙な感覚を有していると言えるだろう<sup>16</sup>。

次に翠芝の変更である。新聞版で翠芝の容貌は、「額にかかった短めの劉海は、彼女の幼さを引きたてていた（4.6）」と述べられている。単行本版では「額にはとても長い劉海が眉毛の上までかかっている、頭の後ろの大きな巻き毛はぼうぼうと乱れていた（p 57）」と変更されている。単行本版で翠芝が映画館へ向かう際、叔恵を気にして服装を変えている事からも、上の変更は、単行本版では翠芝の叔恵を思う微妙な心が強調されている事がわかる。新聞版ではパーティーに行くものの彼女の服装は、「そのような行事には疎かった（4.13）」とだけ書かれている。このことから、単行本版では翠芝の叔恵を思う気持ちがより引きたてられているとすることができるだろう。一鵬の変化は前節で言及したため、これ以上は述べる事はしない<sup>17</sup>。

## 5. 小説の時間的叙述の変更

新聞版では、単行本版、『半生縁』に比べ、多くの時間的叙述において異同がある。まずここでプロットの変更についての節でみた、新聞版における叔恵の共産主義への傾倒を変更したことについて考えてみる。新聞版では、国慶節が行われている事からも、17章の時点は中華人民共和国が成立して後の事、すなわち1949年以降と考えられる。そのため、1章における時点は、16章の「もう18年も経ったのだ」という世鈞の台詞から考えて、1950年または1949年から18を引き算した1931年かもしくは1932年のことであると考えられる。ゆえに彼らが大学時代を過ぎた時間とは1927年から1931年の間の事となる。先にも挙げたように新聞版1章では「叔恵は西北へ行きたいと思っていた。そのような建設中の地方に行って仕事をする。これは、彼と世鈞が大学時代にそのような志があると話していたことである」と述べられている。西北では1927年から1930年の間に清澗、枸邑、華県、渭南といった場所で武装蜂起が行われており、叔恵が大学時代にそのような場所に仕事へ行こうと志していたとしても時間的に問題は生じない<sup>18</sup>。ではなぜ



単行本版で彼は共産主義への志を後の章に遅らせたのであろう。私はそれを張愛玲が小説のバランスを考えた上での変更であったのだと考える。単行本版では 13 章で叔恵が友人から共産主義の思想を聞かされた後、共産主義に目覚め、「…俺も共産主義者という訳ではない、(中略) だけど俺は考えている。俺達のようなエンジニアがここでじっとしていたら、どんなに努力しても支配階級の為に働く事となる」(p 261) と述べている。新聞版、単行本版双方で彼はその後、世鈞と翠芝の結婚を聞かされ、翠芝への思いから仲介人として出席した結婚式で大酒を飲む。しかし新聞版においては叔恵の共産主義への傾倒が早くから提示されており、彼の翠芝への思いが上手く描ききれないままに、翠芝の結婚式で大酒を飲む事となる<sup>19</sup>。その為、単行本版では上記に挙げたように叔恵の共産主義への傾倒を後半部に遅らせる事により、叔恵の翠芝への気持ちに合理性を持たせたとと言えるだろう。

また単行本版 15 章では、曼楨の年齢の描写が「現在彼女は 30 を過ぎた女性である…」(p 318)、「ただし、今となっては結婚してすでに 6、7 年が経っており、(中略) 女性の年齢が中年になると…」(p 339) と述べられているが、新聞版では曼楨の年齢、結婚期間に対する具体的言及は為されていない<sup>20</sup>。この部分は『半生縁』になると「現在彼女は 30 を過ぎた女性である…」(p 303) と前半部分の変更はないものの、後半部は「ただし、現在では結婚して何年かが過ぎており(中略) 女性が 30 歳をすぎると…」(p 322) と変更されている。単行本版から『半生縁』における彼女の年齢の変更は、高論文が述べるように物語内の時間を緊縮させる為であるといえる<sup>21</sup>。新聞版から単行本版への変更について言うなら、改稿する上で、曼楨の年齢がより明確化されているとすることができる。

他に単行本版では、新聞版にのみ存在する次のような世鈞の回想が削除されている。というのも下線部は後の彼の行動を考えると矛盾しているからである。すなわち新聞版、単行本版における世鈞は曼楨との思い出にきりを付け、東北建設へと向かう。

「…ねえ、ちょっと待って、私目が開けられないわ」写真を撮るのは少し中断した。世鈞の頭の中では、もう一つのカメラが「カシャ」と音をたて、この思い出をとっておこうとするかのようなようだった。人の記憶とはおかしなものである…そのカメラの「カシャ」という響き——それはそれ程大した

事ではないのかも知れないが、今ここで思い出してみると、永遠に忘れる事が出来ないものなのである。歳月が過ぎるにつれ、その印象はさらに明らかとなってくるのである。<sup>22</sup> (1.6)

以上のような回想描写は『H.M.プラム』に多く存在し、張愛玲が回想描写に関しても『H.M.プラム』を参考に行っている事がわかる<sup>23</sup>。そして多くは『十八春』という作品において矛盾を生じさせている。

最後に本節の始めに見た国慶節の変更についてである。新聞版では国慶節の様子が詳しく書かれている。単行本版では新聞版のように、「その日は国慶節であった」とは明記されていないものの、「明日はパレードがある」と書かれている<sup>24</sup>。変更の理由としては国慶節に対する具体的叙述を省く事により、叙述の簡略化を図ったのだと考える。

## 6. おわりに

本稿では張愛玲が述べた「前半部の矛盾」を考察した。このように新聞版、単行本版を比較考察してみると、新聞版では世鈞の曼楨への態度が、冒頭部分の回想描写における彼の曼楨への強い思いに対し、ちぐはぐな印象を与えている。そしてそれが単行本版では改善されていることがわかる。またほかにも単行本版では、叔恵の行動を変化させる、一鵬の性格を変更するなどして、物語全体のバランスが整えられている。

新聞版において以上のような問題が生じた理由は、当時張愛玲がマーカンドの『H.M.プラム』を参考に小説を執筆、連載していたことに原因があるといえる。このようなテキスト修正に対する考察は、これまでの研究史において行われていない。よって本稿は、後に『半生縁』へと改作されることになる、『十八春』を1951年当時、張愛玲自身がいかにとらえていたのかについて考える重要な資料の一つになるといえよう。

本稿では新聞版と単行本版に重点を置き比較を行った。今後の課題として、彼女がマーカンドの『H.M.プラム』を参考にした理由や、『半生縁』ができるまでの成立過程について考察したい。

## 註

- 1 張愛玲が梁京名義で執筆した作品は『十八春』、『小艾』の2作品のみ。『小艾』は、現在大陸において出版されている版本に共産主義を称賛す

る叙述が見られるが、しかし台湾版においては物語が変更される事なく、共産主義に関する叙述がそっくり削除されている。台湾版の張愛玲全集（張愛玲『張愛玲全集』皇冠出版社<1991>）に『十八春』は収められていない。

- 2 1951年《亦報》、高唐「訪梁京」。筆者入手の資料では新聞の年月が欠如している為、正確な日付はわからない。しかし文章の内容からみて連載終了以降のものであることは間違いが無い。張愛玲は『十八春』を連載しながら書き継いだ。
- 3 陳子善「張愛玲創作中篇小説《小艾》的背景」（陳子善『私語張愛玲』浙西文芸出版社<1995>所収）
- 4 現在出版されている『十八春』は1951年の初版のものとは比べ、句読点の変更や部分的な文章の削除（ミスプリントであろう）前後の変化が見られる（『張愛玲文萃』文化芸術出版社<2001>、『張愛玲文集』安徽文芸出版社<1992>を参考とした）。また、『十八春』初版と『半生縁』に存在し、現在の単行本には見られない個所などもある。
- 5 張愛玲は後に友人であり『紅樓夢』研究者である宋淇に「作品の構成にJ.P.マーカンドの『H.M.プラム』を参考にした」と述べている。宋淇自身は、両作品を随筆で「細かく読んでみたが、2組の夫婦の思いどおりにならない結婚の他は、ほとんど同じ所が無いように感じた」と語っている（林以亮「私語張愛玲」、陳子善『私語張愛玲』浙西文芸出版社<1995>所収。林以亮は宋淇のペンネーム）。『H.M.プラム』と『十八春』、『半生縁』の関係については台湾の研究者、高全之が「本是同源性」（『張愛玲學』一方出版社<2003>所収）の中で言及している。高論文は作品のプロット展開上の相似という点を指摘している。この点について私も同意見である。細部について私は高論文と意見の相違があるが、紙幅の関係からまた稿を改めて述べたい。なお高論文は資料として『十八春』の初版を用いており、新聞版を用いてはいない。ここで、高論文の述べる『H.M.プラム』と『十八春』、『半生縁』についての登場人物の対応を簡単に紹介しておく。世鈞⇒プラム、曼楨⇒マーヴィン、叔恵⇒ビル、翠芝⇒ケイ、一鵬⇒ジョー、文嫻⇒マデリン。
- 6 本論文で用いる資料は、『十八春』（新聞『亦報』1950年3月25日から1951年2月11日連載）、『十八春』（亦報社<1951>初版）、『半生縁』（皇冠出版社<1991>）、Marquand, J. P. *H.M. Pulham, Esq.*, Chicago : Academy, 1986.による。新聞版『十八春』は、入手した多くの資料の日付が欠如している。新聞版では1章が9日分、2章が13日分とわかれ掲載されているため、論文中にて引用の際には、(1.1) <1章1日目>と表記する。
- 7 新聞版『十八春』は新聞版、単行本版『十八春』を単行本版と表記する。
- 8 新聞版におけるダンスパーティーのプロットは、『H.M.プラム』10章のパーティーのプロットとほぼ同様である。ここで詳しく挙げる事はしないが、台詞、行動ともに張愛玲はそのプロットを参考にしている。
- 9 「本是同源性」（『張愛玲學』一方出版社<2003>所収）。ジョーは一鵬と同様に婚約を解消し、婚約者の友人と結婚する。
- 10 Gross, John J. *J.P. Marquand*, New York : Twayne, 1963, p.65.

- 11 単行本版でも叔父に連れられ南京へ戻るプロットは存在する。
- 12 冒頭場面の世鈞の回想は、新聞版、単行本版、『半生縁』を通して『H.M. プラム』15章におけるプラムの回想とほぼ同様である。
- 13 また新聞版15章では鴻才の家に偉民のみがやってくるが(15.19)、単行本版、『半生縁』15章では偉民夫妻がやって来る事となる。以上の変更には深い意味が有るとは思えない。
- 14 前掲 Gross. *J.P.Marquand*, p.65.
- 15 新聞版で叔恵は翠芝の婚約を世鈞により知らされる。単行本版、『半生縁』では、6章で婚約をする事、上海の大学に進学したい旨を告げる翠芝の手紙が叔恵に届く。新聞版では学校の年刊を出す事となったため、広告を出すのに協力してくれないかという手紙が世鈞に届く(6.2)。また『H.M. プラム』では22章でケイからビルに本を返したいという旨の手紙が届く。
- 16 『半生縁』で叔恵は『H.M.プラム』ビルと同様、後に妻と離婚する。その理由は『半生縁』後半部の叔恵と翠芝の恋愛に対し、合理的処置を施したといえる。
- 17 新聞版において曼楨の妹の名前(曼英)が記されている。彼女の名は単行本版、『半生縁』では登場しない。また新聞版では世鈞の父親が始め、沈嘯峯という名で登場するが(5.1)2度目以降には単行本版、『半生縁』と同じ沈嘯桐へと名前が戻るため、ミスプリントであると考えられる。
- 18 依田憇家編訳『星火燎原』新人物往来社(1971)を参考にした。
- 19 主人公の友人が結婚式で大酒を飲むというプロットは、『H.M.プラム』25章(p287)に存在する。
- 20 新聞版(15.24)、単行本版(p342)、『半生縁』(p325)で同様に、「すでにそれ程若くない」と言及されている。
- 21 『半生縁』では16章での世鈞の回想が、『十八春』の18年から14年へと変更されている。高全之は論文「大我与小我」で、単行本版と『半生縁』の時間的変更を論じている(高全之『張愛玲學』一方出版社<2003>所収)。
- 22 以上は世鈞、曼楨、叔恵が三人で写真を撮りに行くプロットに挿入される。
- 23 他にも世鈞が過去を回想する場面はカットされている。例えば、「彼の一生の中で、この時期に起こったことの多くを彼は永遠に忘れられない。しかし、現在努力して思い出そうとしてみると、かえって少しの事柄も思い出す事が出来ないのである」など。以上は『H.M.プラム』17章「その期間に起きた出来事は私が決して忘れる事が出来ないものだと思っていた。しかし、今思い出そうとするとそれらは全て消え去ってしまっているのだ」(p183)に拠っていると考えられる。
- 24 1951年の単行本版では、「パレードの時に歌おうと準備しているのだ」(P377)と記述されている。しかし現在出版されている単行本では「旅行の時に歌おうと準備しているのだ」と記述されており、これはミスプリントであると考えられる。(『張愛玲文萃』文化芸術出版社<2001>p536、『張愛玲文集』安徽文芸出版社<1992>p311)